

小児看護

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

8

Vol.44 No.9 AUGUST

2021

小児看護とICT

遠隔で行う 看護実践と教育

連載

もっと知ろう！障害がある子どもと
家族のくらしの支え方

てんかんコントロール

児童養護施設の看護実践

成長・発達に対する看護



へるす出版

心が歌えば、世界が揺れる

佐藤聡美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第4回 言葉の腕

病院で迎える入学式や行事は、子どもたちの励みになる。病院は24時間365日体制だが、学校は学期ごとに区切りがあるため、その行事は子どもたちに季節を感じさせてくれる。漫然と入院しているところに、学校は子どもたちに患者ではなく、生徒である喜びを味わわせてくれる。

心理士として子どものがんの告知に同席すると、「あなたには幸運がある」とさりげなく親を力づけた医師もいる。ベッドサイドで点滴を交換しながら、「この虹の先には何があるのか、ワクワクするね」と子どもの絵を鑑賞していく看護師もいる。

医療者は、インフォームドコンセントやカルテに記載されるようなハードな言葉を繰り返し発さざるを得ないことも多いが、親や子どもが心の中で反芻するのは、医師や看護師がかけてくれた、心配や不安の氷を溶かしてくれる一掬の湯のような言葉だ。

もしそのような言葉のやりとりが目に見えたなら、がん病棟はいかに彩り豊かな言葉で溢れているか、世間の人は少しばかり驚くだろう。

驚くといえば、この歌だ。病棟の子どもたちと分かち合いたいと思った。

天の海に 雲の波立ち 月の船
星の林に 漕ぎ隠る見ゆ

「大空の海に雲の波が立って、月の船が、きらめく星の林の中に漕ぎ出して、やがて隠れてゆく」とは、何と幻想的な世界なのだろう。作者を調べてみると、万葉集で有名な柿本人麻呂だった。あまりの古さに軽い衝撃を受けた。

子どもたちが調子の良いときは、全国どこの病棟でもテレビとゲームに没頭している。その隣に親がくっついていような光景にも出くわす。でも本当はピーターパンのように病室から抜け出して、月の船に乗って、いつでも言葉の旅に出ることができる。

小児がんのような稀少疾患により長期に入院すると、同室でもない限り友だちを作るのは難しい。そこで昔、私はカウンセリングの一環として、同じ病気のフロア違いの子どもたちの郵便屋さんを引き受けた。二人とも6歳で治療は辛はずだったが、交換されていた絵手紙はほのぼのとしていた。黄色い家に自分の顔。クレヨンで「げんきですか」と相手に尋ねていた。二人とも病室から出られなかったが、心の中では自由に友だちと遊んでいた。

治療に腕という表現があるならば、今年はぜひとも言葉の腕を磨きたい。そんな決意に、子どもから「言葉に腕なんかついていないよ」とニコニコして言われた。

佐藤聡美
さとう・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士、心理学者。臨床心理士、公認心理師。富山県高岡市出身。米国のBellevue Community Collegeを卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究を行う。小児がんの子どもと家族を支えるエゴノキクラブを主宰する。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。